

「ポジティブ心理学」および

「ポジティブなキリスト教人間論」の原理と方法

(Positive Psychology and The Methods of Christian Positive Anthropology)

金 道 訓

ナグネ (洛雲海) 訳

I. 序論

人間の生における真の目標は何であろうか。人間は何を望んで生きていくのだろうか。それはおそらく幸福であり、豊かな生 (flourishing life) であり、意味ある生 (meaningful life) であろう。このような人間の意図や望みを反映するように、心理学の分野では人間の幸福ならびにウェルビーイング (well-being) を学問の核心とするポジティブ心理学が登場した。ポジティブ心理学はこれまでの二〇年余りの間に非常に大きな発展を遂げ、それを通して人間の幸福ならびにウェルビーイングの要因についての深い研究が進められてきた。ここで注目されるのは、ポジティブ心理学に関する研究の諸主題がキリスト教における諸主題とさまざまな面で相通するという点である。ポジティブ心理学では、幸福、感謝、愛、希望そして苦難の克服について言及され、生の意味やよき生 (good life) が追い求められ、宗教

や靈性のようなものまでもが人間のウェルビーイングに寄与するということが認められている。このことは、ポジティブ心理学がキリスト教神学あるいはキリスト教人間論と深い次元で対話可能であるということを意味する。そのためか、近頃はポジティブ心理学と神学との間でいくつもの対話が起っており、またそうした対話が急速に進展しつつある。このような研究の雰囲気について、ゴリー（Chr. Beley）は次のように伝えている。「人間のフラワーリング（Flourishing）に関する探求は、近年、人々の間で相当大きな関心の的となってきた。フラワーリングという言葉について、ある人々はこれを古典的哲学用語のユーダイモニアの翻訳語と考えており、またある人々はこの用語を、文化や理念また学問間の境界を越えた、多様な生における諸々の良き点について語る様式と考えている。キリスト教神学者たちも、私的にあるいは公的に、グッドライフに対する探求に寄与し得るような新しい道の発見というものが可能であろうとの希望をもって、こうした対話に参加してきた」⁽¹⁾。エレン・チャリー（Ellen Charry）は、キリスト教神学とポジティブ心理学の対話について、これは友情でつながった二人の友人がプレゼント交換するようなものと喩えるほどに、二つの学問間の対話を肯定的に注視している。つまり、フラワーリングに対する人間の二つの接近法として、神学とポジティブ心理学の間には相互に異なる点や領域があるにもかかわらず、両者は互いに互いを開いておく必要があるというのである。⁽²⁾。それで、筆者もこうした対話に身を投じることとなった。このような対話を筆者は「ポジティブ（肯定）神学」運動と呼んでいる。この運動への参与として、筆者はこれまでポジティブ神学に関するいくつかの諸論文を発表してきた。このポジティブな人間論も、やはりこうした運動の延長線上に位置づけられるものである。

拙稿は「ポジティブなキリスト教人間論」についての試みである。拙稿を展開する中で、筆者はまず最新の学問としてのポジティブ心理学を概略的に紹介し、そこに現れた諸主題や諸発見が新しいキリスト教人間論の発展のためにどれほど大きな助けとなるか、また助けとなるならいかなる面で助けとなるのかということについて探ってみようと考えている。実際のところ、伝統的なキリスト教人間論には概して重い雰囲気があった。なぜなら、そこでは人間の生や本

性が否定的に考えられてきたからである。そこでは、人間はいつでも罪人であり、墮落の影響に捕らわれている存在であった。人間の肉体や現世的な生についても概ね否定的に考えられていた。このような考え方がキリスト教的に誤ったものであるわけではないにしても、そこにはどこか物足りないものがあると筆者には思われた。というのも、筆者は人間の本性や生について、これらは総体的に見られるべきものと考えていたからである。ポジティブ心理学はこうした筆者の考えに多くの助けを与えてくれた。しかし、拙稿は事実上試論的な研究であるため、ここにはまだ深く発展させられないでいるものがあるといった物足りなさが感じられる。筆者は、今後より深く研究を進め、希望や喜びを見出せないでいるこの時代において、新しく創意的な人間論を形成していくことを志すものである。

II. ポジティブ心理学の中心主題としての人間の幸福ならびにウェルビーイング

ポジティブ心理学が本格的に登場するのは、一九九八年にマーティン・セリグマン (Martin Seligman) が心理学会会長として選出されてからであった。一九九九年、彼はポジティブ心理学の研究に関心のある一群の学者たちをネットワークで結びつけ、定期的に集会を持ち始めた。そこに集まった人々により、人間のポジティブな側面に関する研究がポジティブ心理学という学問として定立されたのである。これまでの心理学は、主として病的行動障害や歪曲された感情、あるいは劣等感とか鬱病のような心的疾病などの、人間の否定的諸側面やそれらの治療に対して深い関心を向けるものであった。しかし、セリグマンは心理学の関心が人間のポジティブな要素やさまざまな感情をより向上させる方向へと転向されるべきであると主張した。そこで、彼は「どうして心理学が喜びや勇氣、また幸福といったポジティブな主題について研究してはならないのか」と反問することで、当時の心理学的研究に見られた諸傾向を鋭く批判したので

ある。彼は人間の行動に見られる弱点や欠点を研究する心理学から、人間の長所を研究してこれを増進させるような心理学へと、その焦点を変えようとした。これは、まさに伝統的な臨床（異常）心理学のモデルから精神の健康や人間のウェルビーイングの増進に焦点を合わせる健康（wellness）モデルへの移行であった。⁽³⁾ 彼の研究は心理学研究の方向に甚大な影響を与え、ポジティブ心理学や幸福心理学といったポジティブな方向の心理学を発展させる動因的役割を果たすものとなった。彼の努力の後、ポジティブ心理学は非常に短い期間に国際的な運動となった。ポジティブ心理学は一般大衆の間で相当の広まりを見せ、中にはポジティブ心理学をひとつの突破口とも見なす人々も現れて、この二〇年余りの間にこの心理学は治療界でも大きな関心呼び起こすものとなった。⁽⁴⁾ 社会ではポジティブ心理学に関する多くの出版、研究、理論化の作業が始められ、それらが多様な分野に影響を与え、また深いレベルでのさまざまな共同研究も現れつつある。⁽⁵⁾ 現在、この運動は爆発的に成長を遂げ、多くの研究センターや学術単行本および事典類、ポジティブ心理学の歴史、大学の教科書、さらにはジャーナルなどが続いて現れている。また、心理学者、経済学者、起業家といった人々による、多様な角度からポジティブ心理学の観点を収めたベストセラー書籍がいくつも登場した。そればかりか、ポジティブ心理学の実際、ポジティブ心理学と教育、ポジティブ心理学と職場、ポジティブ心理学と宗教、応用ポジティブ心理学、カウンセリングとポジティブ心理学、ポジティブ心理学とコーチングなどに関する数々の書籍も出版されてきた。今現在も、ポジティブ心理学はまるで巨大な洪水が押し寄せるかように研究され、また発表されつつある。⁽⁶⁾

では、ポジティブ心理学とは何なのか。シャイブ（K. Scheib）はポジティブ心理学について、a. 実験的方法を用いた科学的接近を強調し、b. 「個人と共同体ならびに制度的地平において人間のウェルビーイングに寄与する人間の強さや要素に対する研究に焦点を置く」⁽⁷⁾ 学問とこれを定義し、バウムガードナー（S. Baumgardner）は「生の質を増進させる個人の特性、生の選択、生の環境、社会文化的条件を科学的に研究し、幸福や肉体的・精神的健康、意味ある生ならびに徳目という基準によって規定される」⁽⁸⁾ 学問とこれを定義した。ゲール（S. L. Gable）とハイト（J. Haidt）

はポジティブ心理学について「人間やグループ、制度の繁栄や楽観的機能に寄与する条件ならびにその過程に対する研究」と定義した⁽⁹⁾。ストローン (B. A. Strawn) はポジティブ心理学の重要な側面を以下の四点をもつて要約整理している。第一は、ポジティブ心理学は人間の豊かな生 (Flourishing life) に対する科学的探究であることを強調するものであるという点、第二は、ポジティブ心理が人間の病理に関心を置くようなこれまでの心理学の焦点とは違って、人間の goodness (強さや徳目) を強調するものであるという点、第三は、ポジティブ心理学が繁栄した生、意味ある生、成就する生を生きるような人々に特別な関心を置くものであるという点、第四に、ポジティブ心理学は幸福のコンテキスト、また幸福のためのコンテキスト、すなわち幸福を提供し、幸福を可能とするようなポジティブな諸機関 (家族、共同体、組織など) を重要視するという点である⁽¹⁰⁾。だからといって、ポジティブ心理学が人間の否定的な側面を、すなわち人間の苦難の現実や病的側面を完全に否定するものであるというわけではない。ただ、ポジティブ心理学は人間のポジティブな側面を発展させるべきである⁽¹¹⁾と見なすのである。ピーターソン (Christopher Peterson) は「心理学は人間の弱さと同程度に人間の強さにも関心を持たなければならず、また人間の生において最も良くないことを正そうとすることと同程度に、その最も良きことを立てることに⁽¹¹⁾も関心を持たなければならない」と主張している。

それなら、人間の幸福やウェルビーイングあるいはフローリッシュング (Flourishing) な生を決定する要因は何なのか。ポジティブ心理学ではその要因を何と⁽¹²⁾いうだろうか。幸福の要因には、心理的要因、社会的要因、生理学的要因、宗教的要因など、多くの要因があり得るにちがいない。シャープ (T. Sharp) は、幸福の心理的要因として、自己の長所の活用、総合的かつ多様な関係、楽観的思考、自己の統制と受容などを指摘した⁽¹²⁾。クオン・ソクマン (권석만) は、幸福の要因として、ポジティブな人間関係、自己実現、社会的寄与、余暇活動、人生の意味ならびに霊的追求を主張している⁽¹³⁾が、バウムガードナー (S. R. Baumgardner) やクロザース (M. K. Crothers) もこれらに類似した幸福の心理学的要因としてポジティブな情緒や思考、自己調節と自己統制、自己実現、密接な関係、ポジティブな生と心の整

理（瞑想）に言及し⁽¹⁴⁾、またセリグマンもウェルビーイングの要素として、ポジティブな情緒（Positive Emotion）、没入（Engagement）、ポジティブな関係（Relationships）、生の意味（Meaning）、達成（Accomplishment / Achievement）などを挙げている⁽¹⁵⁾。ボルト（M. Bolt）とダン（D. S. Dunn）は、幸福ならびによき生の要素として愛、共感、自己統制、知恵、没入、幸福、自己尊重、謙遜、希望、友情そして社会的支持について言及し⁽¹⁶⁾、ピーターソンは、快樂、ポジティブな経験、幸福、ポジティブな思考、性格の強さ、価値、興味、能力、成就、健康、ポジティブな対人関係、促進制度などを列挙している⁽¹⁷⁾。また、コンプトン（W. C. Compton）とホフマン（E. Hoffman）は、気分、情緒、余暇、没入、瞑想、最高の成果、愛、健康、創造性、美的・芸術的感覚、回復のための弾力性、知恵、性格、宗教ならびに靈性、ポジティブな諸制度といったものが、よき生、幸福な生、人間のウェルビーイングを左右するものと見なした⁽¹⁸⁾。

しかし、ここでひとつの深刻な問いが生ずる。果たして、これらの諸要因を増進することができれば、人間は幸福になり、フラーリッシングな生を享受することもでき、ウェルビーイングな生を生きることができるようになるのだろうかという問いである。実際のところ、現実というものは深刻なまでに残忍である。希望よりは絶望が、喜びよりは悲しみが、幸福よりは不幸が支配している世の中である。にもかかわらず、苦難について言及することなく、人間のトラウマについて論ずることもせず、生の暗い面についても語らないで、ポジティブな情緒やポジティブな強さを強調することで、人間には幸福やウェルビーイングは可能となり得るのだろうか。そこで、ウオン（Paul T. P. Wong）は、より「成熟したポジティブ心理学（mature positive psychology）」⁽¹⁹⁾というものを主張した。彼は次のように語る。「成熟したポジティブ心理学は、ポジティブな経験やポジティブな情緒だけに基づくようなものであってはならない。それはポジティブな経験と否定的経験において弁証法的なもの、逆説的なもの、そして統一的（holistic）なものでなければならぬ。換言すれば、勇気とは畏れの不在ではなく、それにもかかわらず継続していくことのできる能力を意味し、信じることは疑いの不在ではなく、それにもかかわらず信じることのできる力を意味し、樂觀主義とは厭世主義の不在のこ

とではなく、厭世主義を越えて変革をもたらし得る能力を意味するのである⁽²⁰⁾。もちろん、ポジティブ心理学は苦難を度外視して、苦しみを研究対象から排除するものだというわけではない。ポジティブ心理学者のピーターソンは、すでに「ポジティブ心理学者たちは苦しみに関心がないのか⁽²¹⁾」という問いを自らに投げかけ、「苦しみも幸福も両者共に人間を作り上げる部分であつて、心理学者たちは皆、両者に対して関心を持たねばならない⁽²²⁾」と要求している。

Ⅲ. 宗教は人間の幸福ならびにウェルビーイングに影響を及ぼすであろうか

セリグマンは人間のウェルビーイング的要素として、ポジティブな情緒、没入、ポジティブな関係、生の意味、成就といった五つの諸要素に言及はしつつも、⁽²³⁾ 宗教や霊性というものについてはあまり真摯に扱うことはなかった。それは哲学的人間論においても同様であつた。このことについて、パネンベルクは次のように主張した。「人間存在を構成する要素としての宗教の意味は、人間論が分離・独立していく過程でしばしば後方へと追いやられてしまった。現代の人間論は、現代人がキリスト教神学の宗派的理論体系や、さらにはいかなる宗教的テーマに対する既存の明示的な解答についても無関心であるということを反映している⁽²⁴⁾」。ところが、最近のポジティブ心理学においては、これとは異なつた傾向が見られつつある。宗教や霊性というものをポジティブ心理学の重要な主題として扱う学者たちが徐々に増えつつあるのである。ピーターソンは、快楽やポジティブな経験、幸福、ポジティブな思考、性格の強さ、興味、能力、成就、健康、ポジティブな対人関係、ポジティブな制度などをポジティブ心理学の重要な主題として扱いつつも、その一方で教会について扱ひもした。⁽²⁵⁾ コンプトン (W. Compton) とホフマン (E. Hoffman) は、宗教や霊性またポジティブな諸制度といったものが、よき生、幸福な生、人間のウェルビーイングを左右するものと見なした。⁽²⁶⁾ 彼らがこのよう

に宗教や霊性を学問的研究の対象とする理由は、宗教や霊性といったものが、肉体的にも精神的にも人間の健康を強め、生を幸福なものとし、人間がよき生 (good life) を生きるようにもし、また生を意味あるものとし、苦難や疾病や死などに対する際には宗教や霊性といったものが何か他とは異なつた様式を持つていてということを彼らが発見したからである。

ここで一段階より深い問いを投げかけてみよう。宗教や霊性といったものは、いったいどのような仕方、人間の健康や幸福またフラーリッティングな生に対して影響を及ぼすのだろうか。ピーターソンはいくつもの研究を検討した結果、以下の六つの要素をもつてこの問いに答えている。第一、それは人間に対して「宗教が社会的支援を提供する」ものだからである。「一般に社会的支援のようなものが人間のストレスや免疫体系に対してポジティブな影響を与えるということを前提にするならば、宗教共同体は人間の肉体的健康に重要な要素となり得るものである。似た心持ちにある個人々の集まる一共同体の中で信仰生活することが、人間にとって満足し得る生の根源となるであろう」といふことは明らかである。しかも、他の社会的支援体系とは異なつて、宗教的に派生した社会的支援においては、それが支援関係の究極的根源、すなわち助けは神からくるといふ信念にまで拡大されるからである⁽²⁷⁾。第二、それは宗教が人間に対して健康な生のスタイルを持つようにするからである⁽²⁸⁾。第三、それは宗教が人間の人格的統合を増進させるからである⁽²⁹⁾。第四、それは宗教が生産性 (generativity) と利他主義とを増進させるからである⁽³⁰⁾。第五、それは宗教が人間のストレスや生の困難に対して自分なりの独特な対処法を提示するからである。「宗教は、人が予期し得ず、また願ひもしないストレスの要因に対して希望を与えることを可能とし、その理由を説明することもでき、また自らの生をより広い枠をもつて見るよう助け、新しい目的や意味を作り出すことを可能とするものである⁽³¹⁾」。第六、それは宗教が意味や目的意識を提供してくれるからである⁽³²⁾。意味意識と目的意識が人間の主観的なウェルビーイングに寄与するということとは事実である。意味に対するこのような考えは、結局は究極の意味について問うことになるのであるが、このことは

宗教に最も特徴的な意識なのである。

今から、より具体的に霊性や宗教の影響に関する諸実例を説明してみよう。第一に、われわれは霊性とか宗教というものがある健康に及ぼす影響について探ってみる必要がある。ピーターソンは「宗教的な信仰が問題を解決し、ひいては身体的な病までも避けることができるよう人を助けることもできる」と主張する。コンプトンとホフマンも、多くの研究結果を土台として、宗教性というものが人間の健康に対してポジティブな影響を強く及ぼすことを認めている。つまり、宗教的信念に従って治療を拒否したり、医療を無視したりして、健康に害を及ぼすような信仰者たちの例はあるものの、正常な宗教においては、いかなる場合であっても、その宗教性が人間の健康に害を及ぼすという証拠はないのである。⁽³⁴⁾ここで全てを紹介することはできないが、信仰と感謝と祈りとが人間の健康にどれほど大きな影響を及ぼすかということに関する研究は少なくない。

第二に、われわれは人間の幸福な生やフラーリツシグな生というものに対して、非常に大きな影響を及ぼすような意味追求に関連した諸論議について、もう少し探ってみる必要がある。事実、人間は意味を追求する存在である。「人生の意味や目的意識というものは、われわれの生の方向を提示してくれるものであるだけでなく、われわれの生が大切なものであるという価値感を提供してくれるものでもある」。⁽³⁵⁾第二次世界大戦を経験したフランクル (V. E. Frankl) が生の意味を強調し、意味中心療法 (ヘログセラピー)⁽³⁶⁾を提案して以来、生の意味に対する科学的研究が漸増し始めた。それらの諸研究は、もつぱら生には意味や目的があると信じる人々の方がより幸福であるという事実、そのような人々の方が一般的によりウェルビーイングな生を生きるという事実、生への満足を享受し、生をよりよく統制するという事実、働きについてもより強く没頭しているという感じを各自持っているという事実を証明してくれるものである。そして、そのような人々においては、鬱症状や不安、仕事中毒 (ワーカホリック)、自殺への衝動、薬物乱用などの否定的側面がより少なく発見された⁽³⁷⁾というのである。ここで注目されるのは、より重要なことに献身したり、世俗的な関心

事を超越するような理想へと献身するような人々は、そうでない人々に比べて、より高いレベルの意味意識を見せてくれる人々であったという点である。⁽³⁸⁾ このような意識は、概して宗教者や殉教者においてより高いものとして現れるものである。それなら、意味が創造され得る方法とはどのようなものなのだろうか。どのような要素や特性が現れる時に、人はより多くの意味を発見するようになるのだろうか。何が意味ある生を提供するのだろうか。これらの問に対して、ピーターソンは次の六つの答を提示している。a. 「それはより大いなる調和と一貫性ならびに同質感である。自己のアイデンティティや生の目標について、より大いなる調和と一貫性ならびに同質感が見出せる時に、よりいつそう大きな意味が作られるのである。宗教的態度は、まさに生の異質的な諸要素を一貫した方向へと牽引していくことができるであろう」。⁽³⁹⁾ b. 「隣人に奉仕したり、価値ある名分に対して自己献身すること」も、やはり生に対する意味付与に寄与することにはちがいない。このことは宗教者たちの特徴でもある。c. それは「創造性」である。新しいものを作り出すことは、人間の生に重要性を付与することになる。したがって、それは人間をして生を異なった方法で経験するようにするのである。d. 「生を可能な限り満たされたものとして、また深いものとして生きること」が、生の意味を作り出す際に重要である。⁽⁴⁰⁾ e. 苦難は生の意味を作り出すこともできる。苦難を克服することで、人は自らの生を再評価し、変化した生を生きるようになるのである。苦難は自信を持つ感覚を高揚させ、人間関係を強める機会となり、生の哲学を変える契機ともなり得る。また、ほとんどの宗教が認めるように、苦難は霊的成熟の刺激剤ともなるものである。⁽⁴¹⁾ f. 宗教体験のようなものが生の意味を増進させもする。⁽⁴²⁾

第三に、われわれはここで靈性や聖なる感性といった主題へと移行してみることにしよう。すでに簡潔な仕方而言及したことであるが、このような諸現象は生に対して意味を付与したり、幸福な生を営むことにおいて非常に重要な機能を果たすものである。實際上、宗教や靈性に関する研究をせずに、ポジティブ心理学が幸福とか生の意味を論じるということ、われわれは適切なことと考えることはできない。全世界の大部分の人々が神を信じ、あるいは宗教を持つ

ているという現実を考慮するならば、よりいつそうそう言える。しかし、学問的現実においては必ずしもそうあるわけではない。ロペス (S. J. Lopez) とシュナイダー (C. R. Snyder) の主張に従えば、「二〇世紀序盤の心理学者たちには、靈性を無視したり、靈性を病的現象のように見なしたり、靈性を、その裏面に置かれている、より根本的な心理的、社会的、生理的機能へと還元することのできる一つの過程と見なす傾向があった」というのである。⁽⁴³⁾ところが状況は変わり始めた。最近になって、靈性についての研究が急増し始めたのである。ロペスとシュナイダーによれば、その理由は三つある。⁽⁴⁴⁾第一に、それは「靈性が文化的ファクト (cultural fact) となった」からである。第二に、それは「実証的な諸研究が、人間の持つ機能の諸側面と靈性を連携させた」からである。第三に、それは「米国心理学会が宗教性を文化的多様性の変数と定義した」からである。これらの事實は、靈性というものがそれ自体研究するに価する人間の動機として認められたということを意味する。⁽⁴⁵⁾ 実質的に、靈性による生活は人間の生と別ものではない。職場での生活を営み、また日常生活を営むように、靈性による生活自体も人間の実存の一部ということである。このことを否認することはできないし、否認してもならない。したがって、「心理学は、靈性の持つ世界観や方法および諸価値を心理学の持つそれらのものと引き合わせることで、多くのことを得ることができにちがいない。このことを認識した社会科学者たちならびに精神の健康に関係する専門家たちの間では、現在、心理靈性的 (psycho-spiritual) な諸対案を発展させて、靈性的な諸資料を臨床における実践に統合させようとする試みが起こりつつある。また、宗教的伝承に根づく一群の諸価値、構成要因 (construct) についての研究も始められており、こうした靈性と関連した諸主題が、予防、教育、治療の対案として応用され始めた」のである。⁽⁴⁶⁾

そればかりか、聖なる感性、つまり宗教的感性としての感謝や赦し、慈悲や共感、謙遜、畏敬の念、神秘に対する思い、回心についての研究なども増えつつある。こうした研究の諸結果は、靈性というものがどれほど人間のウェルビーイングにとって助けとなるかということを知らせてくれるものである。⁽⁴⁷⁾ 感謝する人々の方が、感謝しない人々よりもは

るかに憂鬱感を持たずにおり、ストレスもより少なく、逆により幸福な生を生きる傾向を見せるというのである⁽⁴⁸⁾。感謝が社会的関係を維持強化し、生に対する満足度を高めることを示す多くの証拠も登場しつつある。そのため、結婚や家族治療を担当するカウンセラーたちは、情緒的親密感や絆への思いを強化する手立てとして、愛する人に対して日々感謝を表現するという訓練を勧めている⁽⁴⁹⁾。赦しも生の質を高めるのに非常に重要な行為であるということとはまちがいない。赦しが必要ならば、怒り、憤怒、心の傷のような諸感情が人の生を疲弊させ、そこでは敵対心や復讐心だけが反復するにちがいない⁽⁵⁰⁾。最近の心理学では、典型的キリスト教における核心的価値としての恵みを科学的に測定する方法を開発し、恵み (Grace, graciousness) というものが人間のウェルビーイングや精神の健康面に対していかに大きな影響を及ぼすものであるかということに関する研究が進められつつある。これらの研究は、恵みというものがウェルビーイングや精神の健康増進に対して非常に重要な役割を果たし得るという結論に到達するものとなっている⁽⁵¹⁾。これ以外にも、人間のフラーリッティングや幸福また肉体的・精神的健康に影響を及ぼすような、ここでは紹介できなかった宗教的徳目ならびに靈性的諸要素は多数存在する。これまでに言及してきたことを整理するなら、ポジティブ心理学は、実験や統計的な諸方法を用いて、主観的経験あるいは主観的情緒といえる宗教的体験や靈性、また、さまざまな徳目の重要性を科学的に立証しつつあると要約できるにちがいない。

IV. 「ポジティブ心理学」に対する評価ならびに

「ポジティブなキリスト教人間論」の方法と原理

喜びと幸福、人間と被造物のフラーリッティングは、キリスト教人間論の重要な主題である。にもかかわらず、これま

での神学はこの問題にそれほど深い関心を持つことはなかった。しかも、そこでは人間の肉体と生、また健康と幸福に対する否定的な認識が強かった。また神学においては、人間は救われるべき存在であるがゆえに、人間に関するあらゆる事柄は徹底して否定的なものでなければならなかった。これまでの「西欧神学は、地上での幸福に対しては虚弱かつ狭小な教理しか持たなかった。そこでは、地上における幸福は、単に罪の赦しについての信仰を通して永遠の裁きに対する恐れから解放されることと理解されていた。このような理解は『神は人間を嫌われ給う』という考えに基づく病理学的心理学的理解でしかない。神の感性は幅広い概念で捉えられるべきところを、これを無視することで、西欧神学は幸福を、単に人が報いとして受けるべき裁きを避けるということだけに制限してしまったのである。もしも、われわれが神の十全に具現された感性的生なるものを認めるならば、われわれは神学を通して、神ご自身の幸福のために人間のフラァーリツシングを楽しまれる神の喜びというものをきちんと理解できるにちがいない。つまり、幸福とは、神と人間とが互いに相手を満たし合うことで享受し合う相互享受なのだ」と理解することになるであろう」。

実際のところ、より大きな問題はキリスト教の靈性である。キリスト教の靈性といえば、それは長期にわたって幸福と敬虔の分離、霊と肉の分離を特徴とする修道院的靈性のことを意味した。モルトマンが指摘するように、修道院的靈性は世俗を離れて「靈的階級に自己をあずけ渡し、独身と貧しさとをもつて生き、福音的な教え、すなわち山上の説教を守り、完全を目指す道を歩むべき義務があると感じる人々によつて形成」されたものであるため、そこでの靈性はいつでも「禁欲と結びつき、長期あるいは短期の断食、瞑想や観照に基づく静寂な時間と結び」つくものであった。そのため、結局は「生を分裂させ、生の活力を麻痺させるような対立が生のだ中に入り来るようになり」、「肉の喜びはいつでも肉体と同一視され」、「道徳が人間を抑圧し、人間は自己嫌悪を通して卑下される」ような結果を招来したのである。チャリーの指摘もまたモルトマンのそれと大きな違いはない。チャリーによれば、修道院的靈性において、幸福は、単に甘き幸福感や肉体的快樂のようなものとして、したがって真のキリスト者であれば避けるべきものとして考え

られていた。そして、価値については、楽しみ、喜び、幸福などの徳目が、平和、正義、平等、知恵といった徳目よりも下位にあるものと認識されていた。こうして、修道院的靈性においては、幸福というものはたいしたものではなく、低い価値しかないもの、また自己満足的なものと思なされたのである。しかし、彼女によれば、本来のキリスト教的伝統においては、平和に、正義をもつて、公平に、賢く生きることこそ、ひとりの人間を幸福にするものと認識されているのであって、そこでは楽しむこと (enjoyment) と良きもの (goodness) とが分離されたことなどなかったということである⁽⁵⁸⁾。ところが、これとは異なつて、修道院的靈性の方は知的好奇心や想像力、笑いのようなものを無視する運動だったのであり、それは自然的欲望を抑制するために飲食、睡眠、セックス、友情、財産などに深刻なまでの制限を加えることを許すような運動だったのである⁽⁵⁹⁾。敬虔主義にも同様にアルコール、ダンス、ゲーム、喫煙、娯楽といったものを概して認めないような雰囲気があつたし、ここでは祈りの歌や賛美歌以外のものについては、他の音楽や芸術などもあまり好ましくないものと考えられていた。このような諸態度は、結局のところ、人をして些細な楽しみまでも靈的に危険なものと考えようにする結果をもたらすこととなつたのである⁽⁶⁰⁾。近代に至つても、幸福に対する否定的な考えについては、それほど大きな変化が見られたわけではなかつた。近代哲学は、幸福を私的感情 (private feeling) に属するものへと変えてしまつた。それは靈性運動に対して過敏な反応を示すようになり、経験や学問をもつて立証でき、また合理的に推論できる情報のみを認識の範疇へと入れることをもつて、喜びや幸福を放棄するようになったのである。同様に、近代のキリスト教人間論においても、人間の理性や進歩が絶対視され、人間の感性や感情は本質的なものと判断されなかつたため、そこでは喜びとか幸福のような人間のポジティブな情緒も些少化 (trivialization) されるような結果がもたらされてしまつたのである⁽⁶¹⁾。

ここでは、先に明らかにしたポジティブ心理学の内容を根拠として、人間論に受容されるべき、またそこで対話されるべき接点を明らかにしてみよう。第一、ポジティブ心理学においては宗教や信仰および靈性のようなものが、人間

の生の幸福や意味の増進にとつて非常にポジティブかつ必要な要素と見なされるということである。このことは、相互に対話の可能性が開かれており、互いに寄与し合える諸要素があるということの意味する。換言すれば、ポジティブ心理学は神学やキリスト教の人間論を再構成し、また拡大することに助けを提供することで、またキリスト教はキリスト教固有のポジティブな情緒や思考をポジティブ心理学に提供することで、互いの学問的外延を広げることができるようになるであろうということである。霊性と宗教的生とが人間の意味ある生と幸福とウェルビーイングに対してポジティブな影響を与えるということが、ポジティブ心理学の多くの実験および研究を通して明らかとなっている。他方、このことはキリスト教神学やキリスト教人間論に反省を要求することにもなる。なぜなら、そこで忘れられていたキリスト教固有のポジティブな諸感性や諸内容をポジティブ心理学が気づかせてくれたからである。第二、ポジティブ心理学の徳目や価値観は、その多くがキリスト教的徳目と相通じることである。ポジティブ心理学において追い求められる生の意味の追求、感謝や幸福や希望の追求、自己統制と節制、苦難と逆境についての部分的肯定、愛の関係などは、キリスト教の目標とある程度類似し、また相通じもする。ポジティブ心理学は、それらを経験科学的に証明し立証しようと試みるものであるがゆえに、ポジティブ心理学を適切に利用するならば、キリスト教神学やその人間論はむしろキリスト教的価値観を合理的に弁証し、それを説明することに多くの助けをポジティブ心理学から得られるにちがいないのである。第三、ポジティブ心理学は人間の生、苦難などに対して意味を付与し得る契機を作り与えたということである。そうして、ポジティブ心理学は人間が被る苦難や痛みというものをうまく克服できるような機会を提供してくれた。これこそはキリスト教の課題であり、キリスト教人間論の役割である。これまでのキリスト教人間論は、人間の苦難を意味ある人間論の一主題として扱うよりは、概して神義論において人間の苦難を扱ってきたのであり、つまり苦難や苦しみというものがどれほど人間の生に対して大きな影響を与えまた寄与するものであるかという問題としてよりは、神は全能であられるのに、なぜ人間は苦難を被らなければならないのかという神義論的な問題としてこれを見なそ

うとしてきたのである。これからのキリスト教神学は、人間の生の一側面としての苦難や苦しみを人間論の重要な主題として扱うことで、予期しえない苦難をもうまく克服していけるようにするべきである。第四、日常の生に意味づけをするということもポジティブ心理学の果たした大きな貢献である。ポジティブ心理学は、幸福についてこの上なく日常的なこと、つまり結婚や家庭、職場のような場での日常的な幸福を追求するのであるが、それはポジティブ心理学が心の安らかさや健康を増進させることに関心を傾げるからである。このことは、最近のキリスト教神学において現れつつある日常についての強調と相当に相通じるものと言えるにちがいない。

これまで述べてきたことを土台として、われわれは「ポジティブなキリスト教人間論」について次のように要約することができようであろう。同じことの繰り返しのようにも感じられるが、筆者のポジティブなキリスト教人間論の原理と方法であるので、ここで再び陳述することとしたい。第一、ポジティブなキリスト教人間論は、人間の本性の問題にのみ関心を向けるものではなく、人間の生の全体を扱うものである。これまでのキリスト教人間論は、概して人間の本性に対してより多くの関心を向けてきた。そのため、それは人間を否定的に、また墮落した存在として描写することに多くの関心を傾けてきた。しかし、人間は人間の本性をもつてのみ捉えられるような存在ではない。第二、ポジティブな人間論は、苦難、悲しみ、苦しみのような人間の否定的な生の姿を、単に否定的なものを見なすのではなく、むしろそれを克服してよりよい生を営める段階を人間が望めるようにし、また苦しみを自ら生として受け容れられるようにもし、苦難の中にあつても自己の生の意味を発見するようにする試みである。言い換えるなら、それは、多くの挑戦や危機に直面する中で、生きるに値する生とはどのようなものであり、真に嬉しく幸福な生とは何なのか、また本当に意味ある真の生とは何であり、生において苦難や悪をどう解釈するのかといったことを研究課題とする作業ということである。第三、ポジティブな人間論は、自死、安楽死、生命のクローンなどのような主題よりは、喜びや幸福、感謝や愛、また希望のようなポジティブな情緒に対し、より多くの関心を傾げる生の神学、生命の神学である。第四、し

かし、ポジティブなキリスト教人間論は、個人の幸福や喜び、あるいは個人のフラーリッシング・ライフを重視しつつも、そのようなものだけを目標とするのではなく、また現世的・物質的な幸福、肉体の健康、精神の安寧などを含みながらも、そのようなものだけを追求するというのでもない。ポジティブな人間論は、それらのものを排除したり罪悪視したりもせずに、しかもそれ以上のことを語ろうとする試みなのである。ここでは共同体の幸福と共に、精神的、霊的、彼岸的なシャロームや喜びといったものも幸福の範疇に含まれる。第五、ポジティブな人間論では、人間を罪と墮落に染まった存在として定義したり、また人間のあらゆる行為によって招来されるものも否定的なものでしかないというような存在として人間を定義したりはしない。ポジティブな人間論は、人間を神の目には極めて善くまた良い被造物として、また生育繁栄を享受するための生を付与され、神の息によって生きたまた生きていく被造物として定義する創造神学的人間論を反映するものである。特に、ポジティブな人間論では、神の似姿としての人間に対するポジティブな解釈が試みられる。人間における神の似姿は、伝統的には人間が所有する理性や意志、感情あるいは関係性、責任性などをもって解釈されてきた。そして、キリスト教人間論においては、こうした人間の神の似姿は罪によって失われたのか、あるいは形式的にでもそれは人間に残っているのかといった問題を通して、多くの論争が繰り広げられてきた。しかし、ポジティブな人間論では、霊や肉、本性や生などの全てを含む人間それ自体が神の似姿と考えられており、墮罪以後も神のその似姿は人間において失われてはいないという立場が堅持される。また、神の似姿という概念の説明においては、それが何よりも他の似姿ではなく、まさに「神の」似姿であるということが前提とされる。そして、この場合の神概念とは、喜び給い、幸せを感じ給い、愛と分かち合いと親しき交わりとをその属性とし給うような神のことである。喜び給う神の似姿がまさに人間なのである。第六、ポジティブな人間論は、人間のシャロームやウェルビーイングあるいは幸福の完全な回復を最終目標とする。しかし、この人間論においては伝統的な神学における墮罪と罪の教理が度外視されることはない。ただこれを人間の運命の最終段階としてではなく、最終以前の段階のものと見なすだけであ

る。この人間論は、罪と墮罪とを人間の条件の非本来的な様相と認めつつも、人間に罪意識を注入したり、人間の原初的な不安や墮罪意識を強めて、それを利用してしようとしたりするものではない。そこでは、救い、解放、自由、復活、永遠の安息という喜びがより究極的な関心事と見なされるのである。第七、この人間論では、個人の幸福に集中するあまり、人間を取り囲む社会構造的な悪や苦しみなどが無視されるようなことはない。むしろ、ここでは社会構造的悪の克服が人間の幸福をもたらし得るということが認められるのである。しかし、ポジティブな人間論では個人の幸福であろうと社会共同体的幸福であろうと、人間の能力によつてポジティブな幸福や完全な喜びが可能となるといったユートピアニズムは排撃される。なぜなら、そこでは人間の究極的な幸福は超越的恩寵によるものだということが信じられているからである。第八、ポジティブなキリスト教人間論では、日常的人間の生の大切さが強調される。事実、キリスト教の人間論において、人間は歴史や自然などを通して起こる神の巨大な救いのドラマの主演であった。人間の日常的生についての物語は、神学や人間論の中に存在することはなかった。聖書において語られる人間の救いあるいはシャロームは、究極的には神と人間との関係回復を指す。しかし、そこでは日常への回復、あるいは普通の生への回復もやはり決して失われることはなかった。聖書では、ひとりの人間が病から解き放たれることも、日常的な人間関係が回復されることも、よく生きること、特別な出来事なくして安全に日常の生を営むことも、救いと見なされている。新約の平和や祝福においては、神との関係回復を通じた救いを意味する霊的な意味合いが強いが、旧約のシャロームや祝福においては、現世的、物質的、日常的な意味合いが強い。したがって、聖書において語られる人間の生をより正確に探究するならば、それはポジティブ心理学との対話においてだけでなく、新しいポジティブな人間論の提示においても大きく寄与することにちがいないのである。第九、ポジティブなキリスト教人間論においては、霊肉二元論ではなく、統全的（holistic）人間観に基づく人間論が提示される。霊魂と肉体を分離して、霊魂の優位性ならびに肉体的性の無視へと続く伝統的人間観は、肉体的健康や幸福など、極めて人間的な生を無視する傾向を見せてきた。第十、ポジティブなキ

リスト教人間論は、人間の生のみならず、その死までもが共に考慮される人間論である。なぜなら、人間にとつては健康で幸福に「よく生きること」(good life)、「意味深く生きること」(meaningful life)も重要であるが、「よく死ぬこと」(well-dying)もまた極めて重要なことだからである。人間の生は、決して死と分けて理解することはできず、死もまた生と分離させてこれを理解することはできない。なぜなら、よく死ぬことはよく生きることにかかっているのであり、またよく生きることはよく死ぬことにおいてその意味がいつそう強められるからである。第十一、ポジティブな人間論は、ポジティブ心理学の挑戦、動機、意図から刺激を受け得るとはいえ、ポジティブ心理学の体系やその方法論に無条件に従いゆくものではない。それは、キリスト教神学のある部分として、キリスト教的特性をよく表すキリスト論を土台とし、三位一体論的人間論を提示しようとするものなのである。

V. 結論——「ポジティブなキリスト教人間論」の土台としてのイエス・キリスト

結論に至つた今、結びに代えて、序論を始めるように「ポジティブなキリスト教人間論」の土台を簡潔に語り、この論文を終えることとしたい。そうすることが筆者の人間論の結びとなると同時に、別の始まりとなるにちがいないからである。語るまでもなく、キリスト教の特性をよく表すキリスト教教理はキリスト論である。それはイエス・キリスト論の無いキリスト教など存在しないからである。ここでの問いは、ではなぜイエス・キリストが「ポジティブな人間論」の土台となるのかということである。その理由は、第一に受肉にある。受肉とは、文字通り神が人間となられたこと、また肉体をまとい人間世界、物質世界に来られたことを意味する。このことは人間に対する、また肉体および物質世界に対する神の最上の肯定を意味する。第二に、その理由はイエス・キリストの働きにある。イエス・キリストの働

きは、もちろん単に人間のためだけの働きであったというわけではないにせよ、人間がイエスの働きの核心的対象であったということは明らかである。彼は神の国を宣べ伝えた。彼にとつての神の国は、上から奇跡的にこの地上へ臨むというようなものではなく、この地上に生きる病者、死に直面した人、傷ついた人、疎外された人を回復することから始まった。汚れた霊に取りつかれたゲラサ人の回復（ルカ八・二六―三九）は、このことを見事に立証するものである。彼は霊肉共に病に侵され、人間関係も喪失し、憤怒と憎悪と自己虐待しか残されていないような人だった。イエスは彼のところに来て、彼の抱えるあらゆる事柄を回復してあげた。彼はイエスによつて人間なら皆持つはずのあらゆる事柄を回復してもらえたのである。さらに彼は喜びの感性までも回復されたのだった。要するに、彼においては全人格的な回復が起こつたのである。このように、イエス・キリストの働きは全人的に人間のウェルビーイングを回復させる働きだった。第三に、十字架と復活についても同様である。十字架と復活こそは、人間を肯定的に受け止め給うた神の自己謙卑、神の自己犠牲、人間へと向かう最高の愛の表現ではなかっただろうか。ところが、今に至るまで十字架はいつても否定的なものとして描写され続けてきている。そして、復活の神学は神学からほぼ消えてしまった。しかし、キリスト神学は初めからキリスト論に集中するものであったし、その中心にはいつでも十字架があつたのである。それは希望と喜びの象徴である復活の神学に対して深い関心を置くことはなかった。特に、ルター派の教会においては、「十字架があらゆる事柄を試みる」という命題からも見えてくるように、ここでは十字架が神学だったのである。そのため、ルター派の教会では「十字架に関する御言葉が説教の中心となり、ややもすれば復活の使信は遠く背後に押しやられてしまう」⁽⁶²⁾といったことが当然の運命としてあつた。ペールマン (G. H. Pöhlmann) は西欧神学が十字架に関して過分に強調することに関して、次のように指摘している。「十字架のみを過分なまでに浮き上がらせることが西欧の伝統と一致するということは明らかだ。しかし、そうした強調が無理なほどに大きくなったため、復活は十字架においてすでに起こった救いについての、単なる同語反復へと格下げされてしまったのである」⁽⁶³⁾。十字架についての無理な強調

と復活の神学の軽視とは、結局は、暗く、暗鬱なる神学の十字架を意味することへとつながる。復活の神学の喪失により、神学が依然として、墓と共にある神学となつていて、ことだけでも問題ではあるが、十字架の解釈としての十字架の神学自体にも問題の余地は多い。正確にいうならば、十字架を強調することが問題なのではなく、十字架についての行き過ぎた強調、つまり苦行的で人間に厳粛さを要求するほどに十字架を強調するということが問題なのである。イエス・キリストの十字架は、外見上は悲しみの出来事であり、悲劇的な出来事ではあるが、これを積極的に解釈するならば、恵みであり、感謝であり、真に喜びの出来事であつた。しかしながら、神学においては、イエス・キリストの十字架は、いつでもわれわれのためになされた、あの方の出来事と理解され、あの方の苦難と痛みと死とにその意味が置かれたのである。ここでは、十字架がわれわれにいかなる結果と意味と変化をもたらしたのかということについて、充分熟考されることはなかつた。われわれに何らかの結果をもたらすこととなつた、あの方の出来事へと再び後戻りするとはした。具体的にいうなら、十字架は人間の救いと幸福のための神の満足だったのであり、神の刑罰ならびに賠償だったのであり、神の犠牲だったのであり、神の代理だつたということである。神の行為として、イエスは十字架に架けられ、死んだのである。だから、イエスの受難の金曜日には、キリスト者にとっていつでも悲しい日だつたし、厳粛な日だつたし、苦行の日だつたのである。十字架は、神が神を通して経験し給うた出来事ではある。しかし、われわれにとつて、それは、究極的には、その変化と影響が現れたわれわれの出来事なのである。十字架の金曜日は、われわれに救いと赦し、そして解放が起こされた日である。したがつて、その日は悲しみの日ではなく、感激と喜びと幸福と感謝の日である。これまでの神学において喜びや幸福が喪失されていたのは、十字架の意味に対するポジティブな意味が喪失されていたことがその原因である。それゆえ、ポジティブな人間論とは、十字架をポジティブに再解釈しようとする試みであり、人間の希望に対する約束の表現として、復活の神学を強調する作業なのである。

序論において明らかにしたように、拙稿は試論的な論稿である。今後、筆者はこれをもう少し補充の上拡大し、より

体系的かつ深度ある人間論として発展させていこうと考えている。拙稿は、キリスト教人間論の再考を促すことについては、まだ微弱なものとはいえ、その役割は果たしたものと考える。喜びの宗教としてのキリスト教にふさわしく、また喜びの知らせとしての福音にふさわしい喜びの人間論が、今後よりいつそう論議されることが期待される。

訳注

(訳注 1) へ へ は翻訳者の挿入。

(訳注 2) 本稿で「ポジティブ」と訳された言葉は、韓国語「긍정 (肯定)」の訳語である。

(訳注 3) 本訳稿で「霊性、霊的」と訳された言葉は、それぞれ韓国語「영성, 영적」の直訳である。

訳者は、この「霊性、霊的」に相当する言葉が日本では広く「スピリチュアルティ、スピリチュアルな」と表記されていることを念頭に置きつつも、韓国語の言葉の持つ意味の幅を踏まえ、ここではあえて「霊性、霊的」という訳語を採用した。

(訳注 4) 本訳稿で「フローリッシング」「ウェルビーイング」と訳されている言葉は、韓国語でも同様の外来語が使われている。

注

※この論文は、ポジティブ心理学と神学の対話を通じたキリスト教人間論の定立を試みるものである。そこで、まずポジティブ心理学についての紹介が必要であったため、本論文の第II章は筆者の韓国語論文「인간론의 신학적 고찰」(2010)を

호한 긍정신학 (theologia positiva) 의 시련적 (試論的) 연구〈ポジティブ心理学と神学の対話に基づく肯定神学 (theologia positiva) の試論的研究〉〉〈한부초간신학단총〈韓国組織神学論叢〉〉(49集 二〇一八年 一月)、『二二一八頁に掲載されたものを若干修正の上補充したものであり』、第三章も同様に筆者の韓国語論文「행복, 기쁨, 열매의 길 (Flourishing), 그리고 교회: 신학과 긍정신학과의 대화에 기반한 긍정교회론의 시도〈幸福・喜び・実りの道 (Flourishing)〉」¹⁾として教会・神学とポジティブ心理学の対話に基づくポジティブ教会論の試み〈『한부초간신학〈宣教と神学〉〉(42集 二〇一七年、六月)、『七九一八頁の内容を引用したものである』ことを明らかにする。

- (1) Christopher A. Beeley, "Christ and Human Flourishing in Patristic Theology," *Pro Ecclesia* XXV (2), Spring 2016, 126.
- (2) Ellen T. Charry, "Positive Psychology and Christian Theology: An Exchange of Gifts," in Gillies Amber et al. (ed.), *Flourishing in Faith: Theology Encountering Positive Psychology* (Oregon: Cascade Books, 2017), 3.
- (3) Alfred R. Brunsdon, "A Three Musketeering Approach to Pastoral Care: Reflections on Collaboration between Pastoral Care, Narrative Therapy and Positive Psychology," *Verbum et Ecclesia* 35 (1), 2014, 7.
- (4) *Ibid.*, 7.
- (5) Stephen Joseph (ed.), *Positive Psychology in Practice: Promoting Human Flourishing in Work, Health, Education, and Everyday Life* (Hoboken NJ: John Wiley & Sons, 2015).
- (6) *Ibid.*, 17–19.
- (7) Karen Scheib, "All shall be Well: Flourishing and Wellbeing in Positive Psychology and Feminist Narrative Pastoral Theology," *The Journal of Pastoral Theology* 24 (2), winter 2014, 2–1–2–17, 2–4.
- (8) Marie Crothers Steve Baumgardner, *Positive Psychology* (Prentice Hall, 2010), 9.
- (9) Shelly L. Gable & Jonathan Haidt, What (and Why) Is Positive Psychology? (2005). Charles H. Hackney, "Possibilities for a Christian Positive Psychology," *Journal of Psychology and Theology* 35, 2007, 211–221, 213 以下の註出典。
- (10) Brent A. Strawn, *The Bible and The Pursuit of Happiness: What the Old and New Testaments Teach Us about the Good Life* (Oxford University Press, 2012), 21. (『六二』 Strawn 著)

- (11) Christopher Peterson, *A Primer in Positive Psychology*, 민웅민 김인자 박수현 (トシ・ロシリン' キム・インシヤ' シク・スロムン) 訳, 『긍정심리학 프리미어 (ホシシヤ'インシヤ'トシロー)』, (안양 (アニヤン): 뮌푸레 (ムンブレ), 2010). (シド' peterson 著)
- (12) T. Sharp, *The Happiness Handbook: Strategies for a Happy Life*. 마병기 (ベン・シムンキ) 訳, 『행복심리학 (幸福心理学)』, (서울: 인간사랑 (ンウソ: 人間サトウ), 2008).
- (13) 권석만 (ケン・シクマン), 『긍정심리학: 행복의 과학적 탐구 (ホシシヤ'心理学: 幸福の科学的探究)』, (서울: 학지사 (ンウソ: ナクシヤ), 2009).
- (14) S. R. Baumgardner & M. K. Crothers, *Positive Psychology*, 안신호 외 7인 공역 (アン・シンホ타' 七人共訳), 『긍정심리학 (ホシシヤ'心理学)』, (서울: 시그마프레스 (シグマプレス), 2009).
- (15) Martin Seligman, *Authentic Happiness: Using the New Positive Psychology to Realize Your Potential for Lasting Fulfillment*, 김인자, 우문석 (キム・インシヤ' ウ・ウンシク) 訳, 『마틴 셀리그만의 긍정심리학 (トルティン・セリグマンのホシシヤ'心理学)』, (뮌푸레 (ムンブレ), 2011). 황민 Martin Seligman, *Flourish: A Visionary New Understanding of Happiness and Well-being*, 김인자, 우문석 (キム・インシヤ' ウ・ウンシク) 訳, 『마틴 셀리그만의 플로리시 (トルティン・マリグマンのフラーリシ)』, (뮌푸레 & 행복에 대한 새로운 이해 (ウエルビューン' 행복に対する新しい理解)』, (뮌푸레 (ムンブレ), 2011). これら五つのウエルビューン'의 要素について' 彼はこれらを各最初の頭文字を採って PERMA と呼んでいる。
- (16) Martin Bolt, Dana S. Dunn, *Pursuing Human Strengths: A Positive Psychology Guide*, 김진주 (キム・ジンジュ), 김정호 (キム・シムンホ) 訳, 『긍정심리학: 인간강점의 실현 (ホシシヤ'心理学: 人間の強みの実現)』, (시그마프레스 (シグマプレス), 2017).
- (17) Peterson.
- (18) William C. Compton, Edward Hoffman, *Positive Psychology: The Science of Happiness and Flourishing*, 2nd ed., (Wadsworth, Cengage Learning, 2013). (シド' compton & hoffman 著)
- (19) Paul T. P. Wong, 'The Positive Psychology of Suffering and Tragic Optimism', in Paul T. P. Wong, Lillian C. J. Wong, Marvin J. McDonald, Derrick W. Klaassen (eds.), *The Positive Psychology of Meaning and Spirituality* (Charlottesville VA: Purpose

- Research, 2012), 254.
- (20) Ibid.
- (21) peterson, 38.
- (22) Ibid.
- (23) Seligman, *Authentic Happiness*. 김인자, 우민자 <キヤ・ソングィヤ' ウ・ソングィタ> 訳, 『 긍정심리학 <ポジティブ心理学>』. 著: Seligman, *Flourish: A Visionary New Understanding of Happiness and Well-being*, 우민자, 안성민 <ウ・ソングィタ' フン・サングィン> 訳, 『플로리시: 웰빙과 행복에 대한 새로운 이해 <フラーリッシンヅ: ウェルビーイングと幸福に対する新しい理解>』.
- (24) W. Panenberg, *Anthropogie in theologischer Perspektive*, 박인영 옮김 <バンク・イリモン> 訳, 인간학 I <人間学 I>, (문도출판사 <ヘンツウ출판사>, 1996), 16.
- (25) peterson.
- (26) compton & hoffman.
- (27) compton & hoffman, 233. 그의 다른 주장의主張は A. Bergan & J. T. McConatha, "Religiosity and Life Satisfaction," *Activities, Adaptation, and Aging* 24 (3), 2000, 23-34. D. G. Myers, "The Funds, Friends, and Faith of Happy People," *American Psychologist* 55 (1), 2000, 56-67 の研究に基づいたものである。
- (28) compton & hoffman, 233.
- (29) Ibid.
- (30) Ibid.
- (31) Ibid.
- (32) Ibid.
- (33) peterson, 522.
- (34) compton & Hoffman, 230-231, 편저란 <トホム・ソングィン>, 『 긍정심리학: 행복의 과학적 탐구 <ポジティブ心理学: 幸福の科学的探究>』, (학지사 <ハクシ社>, 2008), 461.

- (35) 편저만 〈타론·논타론〉, 446.
- (36) V. Frankl, *Men's Search for Meaning*, 이시형 〈우·니르만〉역, 『죽음의 수용소에서 〈死の収容所に于て〉』, (청아 〈차론·타론〉, 2012). V. Frankl, *The Will to Meaning: Foundations and Applications of Logotherapy*, 〈우·니르만〉역, 『삶의 의미를 찾아서 〈生の意義を求めて〉』, (청아 〈차론·타론〉, 2005).
- (37) Shane J. Lopez & C. R. Snyder, (ed.), *The Oxford Handbook of Positive Psychology* (New York: Oxford University Press, 2009), 680. (자니' lopez & snyder 역)
- (38) lopez & snyder, 680.
- (39) peterson, 234.
- (40) 다·우·니르 peterson, 235 參照°
- (41) peterson, 235.
- (42) peterson, 236.
- (43) lopez & snyder, 611.
- (44) Ibid.
- (45) lopez & snyder, 616.
- (46) lopez & snyder, 617.
- (47) peterson, 236–258.
- (48) peterson, 237.
- (49) Ibid.
- (50) peterson, 238.
- (51) Rodger K. Bufford, Amanda M. Blackburn, Timothy A. Sisemore, Rodney L. Bassett "Preliminary Analyses of Three Measures of Grace: Can They be Unified?" *Journal of Psychology & Theology* 43 (2), 2015, 86–97.
- (52) Ellen T. Charry, "The Necessity of Divine Happiness: A Response from Systematic Theology," in B. A. Strawn (ed.), *Bible and the Pursuit of Happiness* (New York: Oxford University Press, 2012), 230. (자니' charry necessity 역) Nadia Marais 다·

人間のフラーリッキングについて、これを癒やし、美しき、喜びをもつて描写する Ellen Charry の救済論を分析している。"Happy? A critical analysis of salvation in Ellen Charry that portrays human flourishing as healing, beauty and pleasure," *Verbum et Ecclesia* 36 (1), 2015, 1-10 を参照。

- (33) J. Mohmann, *Der Geist des Lebens: Ganzheitliche Pneumatologie*, 김관진 〈キム・クワンジン〉訳, 대한기독교서회 〈大韓基督教書會〉, 1992, 118. (『다』 'geist' 巻)
- (34) *geist*, 118.
- (35) *Ibid.*
- (36) *geist*, 126.
- (37) *geist*, 133.
- (38) Ellen T. Charry, "On Happiness," *Anglican Theological Review* 86 (1), Winter 2004, 20-22.
- (39) *Ibid.*, 23-24.
- (40) *Ibid.*
- (41) *Ibid.*, 24-25.
- (42) G. H. Pöhlmann, *Abriss der Dogmatik*, 이관진 〈イ・クワンジン〉訳, 『표의학 〈教義学〉』, (서명: 신앙탄생장사 〈ソウル: 信仰と知性社〉, 1989), 280 からの再引用。
- (43) *Ibid.*, 280. Gilles Ambler et al. (ed.), *Flourishing in Faith: Theology encountering Positive Psychology* (Oregon: Cascade Books, 2017), 100 も同様の指摘を含んでいる。